

「NYのルネサンス・チャータースクールを訪問して： ～創価教育⁽¹⁾のアメリカにおける実践とは～」

富岡 比呂子

はじめに

1. RCS（ルネサンス・チャータースクール）について

- ① アメリカの教育行政におけるチャータースクールの位置づけ
- ② RCS設立の経緯
- ③ RCSの教育理念・スクールモットー
- ④ カリキュラムの特色
- ⑤ 在校生のプロファイル・教育成果

2. RCS見学記

- ① 校内の設備（教室・特別教室・校内放送スタジオ・体育館・カフェテリア・廊下のフリースペース・遊具）
- ② 授業風景（高校生・プレスクール）
- ③ 使用教科書や教室および校内の展示
- ④ 在校生へのインタビュー

3. まとめ

- ① 校長へのインタビューを通して
- ② 創価教育の実践的側面とは

はじめに

本稿は、筆者が2011年6月に訪問見学させていただいた、アメリカ・ニューヨーク州にあるルネサンス・チャータースクール（Renaissance Charter School：以下、RCSと記す）について
の見学記である。まず最初に、RCSを訪問するに至った経緯について簡単に述べたい。筆者は

⁽¹⁾ 本稿での「創価教育」の用語は、創価の名を冠した一貫教育機関で行われる教育のことではなく、牧口常三郎の『創価教育学体系』に記されている「価値を創造する教育」を広義として用いる。

「ニューヨークに牧口先生（創価学会初代会長牧口常三郎。以下、牧口と記す）の教育理念を実践する学校があるらしい」という話を数年前から聞いており、機会があれば訪問してみたいと興味を抱いていた。今回、カナダでの学会発表で出張する折に、ニューヨークを経由することがわかり、可能であれば必ずRCSを訪問したいと考えるに至った。そこで、本研究所の客員研究員をしていたシカゴのデ・ポール大学のジェイソン・グーラー博士を通して、RCSの設立から中心人物として携わり、1993年から2007年まで校長職を務めたモンテ・ジョフィー博士を紹介いただくことになった。ジョフィー博士とは渡米まで数回にわたって電子メールでのやりとりを通して、お互いの研究トピックについて意見を交わし合うことができた。特に筆者の研究テーマのひとつが「海外における創価教育の理念と実践」となっていることに興味を示してくれたようで、RCSの訪問見学の依頼についても、快く承諾してくれた。

本稿は以下の流れで進めていきたい。まず、そもそもチャータースクールとはどのような学校かについて、アメリカの教育制度における位置づけについて概観する。簡潔に述べると、チャータースクールとは公立学校でありながらも、学校ごとに私立のような特色を打ち出すことができるというメリットがある選択制の学校である。そのうえで、RCSが設立された背景について、ジョフィー博士らの論文を通して明らかにする。RCSの教育理念やスクールモットー、またどのような児童生徒が在籍しているのかについてもふれたい。次に、実際にRCSを訪問見学したときの様子について、現地で撮影した写真を交えながら紹介していきたい。大きなビル一棟が学校という形の、日本ではあまり見ることのできない様式ではあったが、さまざまなスペースを効果的に用いている様子が伺えるだろう。校内には、随所に「Developing Leaders for The Renaissance of New York」のたれまくが掲げてあり、『NYのルネサンスのリーダーたれ』というスクールモットーが打ち出されていた。最後に、RCS校長のゴートイエ先生へのインタビューやジョフィー博士との対話を通して見えてきたもの、すなわちアメリカという社会文化的文脈における創価教育の実践的側面について考察する。

1. RCS（ルネサンス・チャータースクール）について

① アメリカの教育行政におけるチャータースクールの位置づけ

チャータースクールとは、1991年にアメリカで導入された教育制度の一つで、いわゆる選択制の独立した公立学校のことをさす⁽²⁾。数年単位で教育成果や活動が査定され、そこに一定の成果をあげる責任は求められるが、それ以外の諸規則には各学校の自由裁量が認められるのが特徴であり、学校ごとに様々な特色やアピールポイントを掲げている。「チャーター」とは日本語では「認可状」のことであり、学校を立ち上げて運営する主体と、そうした学校を認可し、監査する

⁽²⁾ チェスター・E・フィンJr.、ブルーノ・V・マンノ、グレッグ・バネリック 高野良一監訳 『チャータースクールの胎動—新しい公教育をめざして』、2001年、青木書店。

公共団体との間で交わされる契約のことを意味する。鵜浦（2001）は、チャータースクールの基本概念について、従来の公立学校との違いに着目して以下の9つの特徴をあげている。

1. 学校は複数の当事者によって組織、所有、運営される。
2. 組織者はチャーターのために二つ以上の公共機関に申請できる。
3. 学校は法人格をもつ。
4. 学校は公立である。つまり、非宗教的、授業料なし、入学者を選抜しない、厚生・安全にかんする方にしがう。
5. 学校は生徒の学業成績に責任を負う。その目的を達成できなければ、チャーターを失う。
6. 学校は制度上、運営上の慣習から自由である。
7. 学校は選択される学校である。いかなる生徒も入学を強制されない。
8. 州は学校予算の正当な部分を生徒の学区からチャータースクールへ委譲する。
9. 新しい学校の設計に参加する場合、教員は恩給の権利を残したまま本務校から出校許可を受ける⁽³⁾。

このようにチャータースクールは、入学を望むすべての子どもに人種、宗教、学力に関わりなく門戸を開き、税金で運営されている点（授業料は取らない）では公立学校と変わらないが、カリキュラムを含む教育内容・授業スタイル・指導方法・教職員・予算・学事の計画や予定などの領域で広範な裁量権を持つことができるという点では、私立学校の長所を兼ね備えている。つまり、公立校の精神と民主主義的な価値観を保持しながら、私立学校の柔軟性を併せ持つという点で魅力的な学校といえるのである。

チャータースクールの認可者は通常、州ないしは地方の教育委員会であり、いくつかの州では公立大学もチャーターを発行する権限を持つ。契約期間は一般には5年間であり、その期間内にチャータースクール設立時の応募書類に記載された「期待される教育成果（学業成績や出席率・卒業率、希望入学者数など）」を達成していれば契約は更新されるが、もし達成していない場合、閉鎖される場合もありうる。

チャータースクールの中には、いくつかのユニークな特色をもった学校が見られるので、そのうちのいくつかを例として紹介したい。たとえば、学習障害児の母親たちが創設メンバーに加わったチャータースクール⁽⁴⁾では、クラスの定員数を少なくして、教師の目が一人ひとりの生徒にできるだけ行きわたるように工夫をしている。また、生徒の学習スタイルの得意・不得意分野や身体の五感の発達状況をふまえたうえで、一人一人の生徒が自分に合った学習方法を選択することができる。さらに、子どもへの心理的なサポートに関する知識や理解を促すための心理学

⁽³⁾ 鵜浦裕『チャーター・スクールーアメリカ公教育における独立運動ー』、2001年 勁草書房、12-13頁。

⁽⁴⁾ 鵜浦裕『チャーター・スクールーアメリカ公教育における独立運動ー』、103頁。

コースを開講し、父母も関連のワークショップに参加できるなど、保護者を巻き込んだ活動を展開している。また、犯罪者更生のためのNPO法人が開校したチャータースクール⁽⁵⁾では、未成年裁判システムで有罪判決を受けた、あるいは受ける可能性のある高校生を対象としている。さらに、私立大学と提携するチャータースクール⁽⁶⁾もあり、そこでは大学の学生がメンターやチューターとして同校の高校生を教えたり、高校生は大学の一部の授業を聴講したり、大学の図書館施設やコンピュータ設備を利用できるなど、「高大一貫」を一つのアピールポイントにしている。保護者は各チャータースクールの特徴を見ながら、わが子をどの学校に入れるか選択することができる。しかし、新しいチャータースクールの場合、実績を持たないため、そこに入学させるということは親にとっても一つの賭けであり、大きなリスクを伴うともいえよう。

② RCS設立の経緯

上記に述べたように、チャータースクールは、教育方針やカリキュラムなどを比較的自由に設計できるという特徴を持つが、州から補助金をもらうまでに選考がある。また、外部機関から教育成果（生徒の学力など）を評価されて、契約期間内に一定の成果をあげていなければ閉校になることもある。そのような中で、RCSはどのようにして設立まで至ることができたのだろうか。

今回の見学において、現地でのコーディネーターを務めてくれたモンテ・ジョフィー（Monte Joffee）博士はニューヨーク州のルネサンス・チャータースクール（RCS）創設者の中心的メンバーで、開校後15年間にわたり校長を務めた人物である。彼がRCSを設立した経緯についてはジェイソン・グラー氏とアンドリュー・ゲバート氏との共著論文に掲載されている（Joffee, Goular, & Gebart, 2009）⁽⁷⁾。

ジョフィー博士は、牧口教育思想を公教育の場面において実践的に応用することを志向していた。その頃、「公立学校への新しいビジョン」という名のニューヨーク市の教育改革のコンソーシアムにおいて新しい学校の提案書の募集があり、彼は同僚の教師たちとともにプロポーザル（学校設立の提案書）を提出することにした。彼の一つの理想は、牧口の価値創造の教育（日本語で「創価教育」）を実現させることであつたが、その時点では、ジョフィー博士以外の誰も牧口の『創価教育学体系』の英語版⁽⁸⁾（Bethel, 1989）さえ読んだことのない状態であつた。同僚とベセル氏の著作⁽⁹⁾を読み合いながら牧口について学んでいく中で、子どもにとって価値とは何か、

⁽⁵⁾ 鶴浦裕『チャーター・スクール ―アメリカ公教育における独立運動―』、127頁。

⁽⁶⁾ 鶴浦裕『チャーター・スクール ―アメリカ公教育における独立運動―』、153頁。

⁽⁷⁾ Joffee, M., Goular, J., & Gebart A. (2009). Practical Implementation of Soka Education: A Dialogue With Monte Joffee *Educational Studies*, 45, 181-192.

⁽⁸⁾ Bethel, D. M., ed. (1989). *Education for Creative Living: Ideas and Proposals of Tsunesaburo Makiguchi*. Ames: Iowa State University Press.

⁽⁹⁾ Bethel, D. M. (1973). *Makiguchi the Value Creator: Revolutionary Japanese Educator and Founder of Soka Gakkai*. Tokyo: Weatherhill.

教師はどうすべきか、という議論になり、「教育とは子どもがよりよい人間、より賢い人間、すなわち人生において価値を創造しうる人間になるのを援助する営みである」こと、また「子どもたち一人一人に自身が価値ある人間であることを感じさせていくのが教師の役割である」という結論に至った。

ジョフィー博士たちは、学校の骨格となる教育理念について討議を重ねた。彼らは牧口が地理学者であり、地域社会（コミュニティ）と連携した学習を重視していることに着目し、その観点をプロポーザルに入れていくことにした。さらに、現在では広く使用されている人道的教育（humanistic education）という概念と「価値創造の教育（value-creating education）」とをきちんと体系づけてとらえることをめざした。あるとき、一人の教員が池田大作の著作である小説『人間革命』からの一節を引用した。この本は、冒頭に「一人の人間における偉大なる人間革命はやがて一国の宿命転換をもなしとげ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」⁽¹⁰⁾ という主題が記されているが、この言葉が彼らを触発した。『社会を変革しうるリーダーを育成する学校を作りたい』という思いが強くなってきたのである。そして、スクールモットーを『Developing Leaders for The Renaissance of New York(ニューヨークのルネサンスのリーダーの育成)』と掲げ、学校名もそのモットーから取って「ルネサンス・スクール」としたのである。

ジョフィー博士たちは学校設立のプロポーザルに牧口の教育理念を入れることになった。つまり、この学校のゴールは自分で価値を創造できる人材を育成すること、そしてそのような人材が将来的には活気あふれる新世紀を先導するリーダーとなっていくであろうことを記した。1991年の4月にプロポーザルを提出し、他に申請のあった300ものプロポーザルの中から40チームが面接へと進むことができた。そして、ジョフィー博士たちのチームは学校開設の許可を得ることのできた最終的な16の学校のうちの1つに選ばれた。こうした経緯を経て、1993年に晴れてRCSを開校することができたのである。その後チャータースクールとしての実績を積みあげながら、2000年、2005年、2010年とその十分な教育成果が評価され、現在も5年ごとの契約更新を続けている。

③ RCSの教育理念・スクールモットー

では次に、RCSの教育理念についてみていきたい。上記に述べたように、スクールモットーは『Developing Leaders for The Renaissance of New York(ニューヨークのルネサンスのリーダーの育成)』となっている。その基盤として、人間教育、価値創造の教育という概念がある。現校長のステイシー・ゴーティエ氏は、この文脈におけるルネサンスの意味について、「能力があり、説得力のある理性的な人間で、よき市民としての責任を全うし、ニューヨークのルネサンス（文芸復興）に貢献しうる生涯学習者（life-long learner）である」⁽¹¹⁾ と語っており、「我々が育成しようとしているのは、よりよい人材、より賢い人材、つまり人生における価値を自身で創造し

⁽¹⁰⁾ 池田大作 『人間革命』第一巻、1965年、聖教新聞社、「はじめに」3頁。

⁽¹¹⁾ RCSのHPを参照（<http://www.renaissancecharter.org/about/message>）。

うる人材のことです」と述べている。この、生涯にわたって学び続ける生涯学習者という観点は、牧口の「人生の目的は幸福、すなわち生涯を通しての幸福であり、教育もそれに寄与すべきである」⁽¹²⁾ という理念に基づくものであると考えることができよう。

④ カリキュラムの特色

ジョフィー博士は、RCSの特徴として以下の4点をあげている。1点目は「地域社会の学習」であり、これは牧口の人生地理学の理念を応用したものとみることができる。『ニューヨーク市およびニューヨーク州についての学習』はRCSの中心的カリキュラムの一つとなっている。そのカリキュラムでは、数学、科学、言語科目や社会科学系の科目も、「ニューヨークの地理、歴史、経済、文化や人々についての学習」に関連付けて学ぶことができる。生徒は、自分たちの住むニューヨーク市についてよりよく知ることで、自分のルーツや文化的・社会的なバックグラウンドを知り、またどのように自分たちがより広い世界とつながっているかについての知識と理解を深めることができる。

2点目は「保護者との協力関係」であるが、これも牧口のいう地域社会との連携の重視の観点とも関連するといえる。RCSは学校運営にあたり、地域社会や保護者の意見を取り入れ、常に子どもの状況を保護者に伝える体制をとり、連携を密にしている。つまり、校長や教育委員会主導のトップダウン式の学校経営というよりは、保護者たちとの連携・協力関係を基盤にしたボトム・アップ式の経営方式をとっているのである。チャータースクール自体が、保護者らの要望によって設立される背景があることを考えると、これも当然のことといえよう。

3点目は「ティームティーチングやルーピングを基盤にした教育」である。ティームティーチングとは複数の教員が協力して1つ、もしくは複数のクラスの授業を担当することである。リーダーの教師を中心として、何人かの教師が協力し合いながら、それぞれの得意分野や持ち味を生かすことで、一人の教師では対応が困難であった多様なニーズを持つ子どもたちの教育支援を可能にする画期的な指導方法の一つである。RCSでは、教科に応じて各教師の個性や能力を活かしたティームティーチングを行っている。ルーピングとは、一人の教員が2年もしくは3年にわたり、同じ生徒の学級担任になることであり、一定期間継続して子どもの成長・発達を見ることが、児童生徒の教育支援を効果的に行うことができる体制のことである（これは日本の公立小学校でもクラス替えは2年に一度なので、同じシステムといえるであろう。）。

4点目は、「キーレッスン」である。これはRCSを特徴づける授業カリキュラムのことであるが、その核となる理念については、一部牧口の思想が取り入れられている。一つは「プラグマティズム (pragmatism)」であり、「保護者の意見の組み込み (incorporating the voices of parents)」

⁽¹²⁾ 牧口常三郎 『牧口常三郎全集 第五巻 創価教育学体系（上）』、1982年、第三文明社。「第二篇 教育目的論」を参照。

や「協同と民主主義に対するより複雑な理解 (a more complex understanding of collaboration and democracy)」「人間の (人生における) 仕事と親切心の重要性 (the importance of human engagement and kindness)」「多様性の尊重 (respect of diversity)」⁽¹³⁾ などが見られる。これらの基本概念をふまえたうえで、独自のカリキュラムを開発・実践している。

⑤ 在校生のプロファイル・教育成果

次に、RCSのプロファイルについて紹介する。RCSはニューヨーク州のラ・ガーディア空港の近くのジャクソンハイツ (Jackson Heights) という町にあり、いわゆるK-12 (幼稚園から12年生まで) にあたる児童生徒の教育をおこなっている。在籍児童生徒の総数は537人となっている (2011年4月時)。

在校生の人種的背景はさまざまであり、多い順にあげるとヒスパニック系が43.1%、アフリカン・アメリカンが19.8%、ホワイトが19.4%、アジア系が17.2%、その他 (混血 0.2%、ネイティブ・アメリカン0.4%) となっている⁽¹⁴⁾。アメリカにおける多数派である白人生徒が2割弱であることを見ると、いわゆる人種のマイノリティに門戸を開いている学校と考えられる。このように、さまざまな人種の背景を持つ生徒が入学していることから、RCS自体が多様な民族、才能、能力を持つ人々を受け入れる「人種のるつぼ」であるニューヨークの一つの縮図を示しているといえよう。彼らの多くは近隣のノース・コロナ、アストリアやロング・アイランドシティを含むクイーンズ群から通学している。

RCSのあるジャクソン・ハイツは、おもにインドからの移民を含むマイノリティが多く住む地域で、社会経済的地位はあまり高くはない。それにも関わらず、RCSの在校生は学校への出席率、卒業率および標準テストの結果において、周辺地域の学校よりも平均的に高いパフォーマンスを示している。ここ数年、出席率は93%以上を維持している。RCSには大学進学希望者のためのexemplary college bound programがあり、ここで生徒は学力だけでなくリーダーシップを身につけるトレーニングを行う。その成果として、2005年以降、毎年の卒業率は92~97%であり、この2年間はほぼ100%の卒業生が、ニューヨーク大学やトリニティ・カレッジをはじめとした大学に合格している。2009年には3~8年生のうち91.7%が英語の、そして96.7%が数学の標準テストのスコアが全国の平均的水準を超えた⁽¹⁵⁾。以上のように、RCSは開校以来、独自のカリキュラムを展開するだけでなく、在校生の学力向上や大学進学率においても十分な教育成果を上げているといえる。

⁽¹³⁾ Joffee, M., Goulah, J., & Gebert A. (2009). Practical Implementation of *Soka Education*: A Dialogue With Monte Joffee, p. 185.

⁽¹⁴⁾ RCSのHPを参照 (<http://www.renaissancecharter.org/about/overview>)。

⁽¹⁵⁾ RCSのHPを参照 (<http://www.renaissancecharter.org/about/distinctions>)。

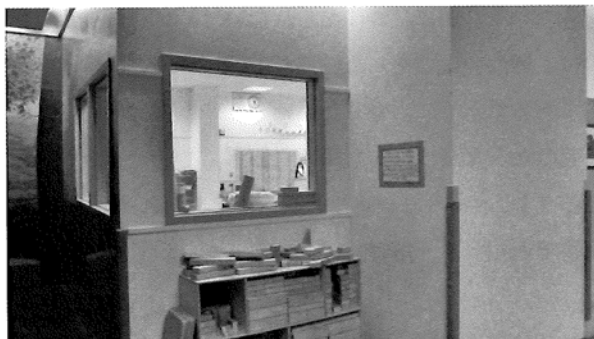
2. RCS見学記

それでは、実際にRCSを見学したときの様子についてみていきたい。今回の訪問の経緯でもふれたように、筆者は創価教育の概念や牧口先生の教育理念がRCSにおいてどのように反映されているのかに興味があり、訪問を楽しみにしていた。そして、晴れて6月22日、ニューヨーク州のRCSを見学する機会に恵まれた。ニューアーク空港にはモンテ・ジョフィー博士が迎えに来てくださり、車で学校へ向かった。

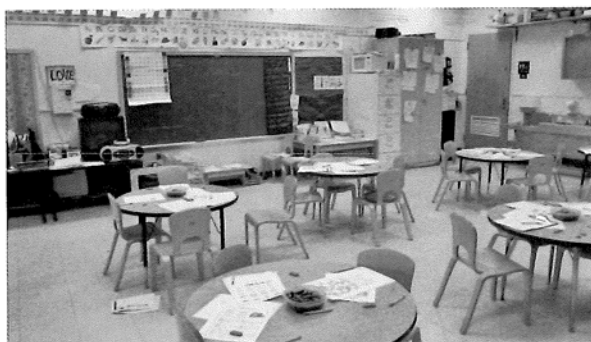
学校では、まず入口でパスポートやクレジットカード等のID提示を求められた。日本とは全く異なるこのシステムに驚いたが、周囲の治安も考慮してのことだそうで、子どもたちの安全を守るためのセキュリティがしっかりしていると感じた。次に職員室へ通していただき、先生方にご挨拶をした。そこで、校長先生にもお会いすることができた。

① 校内の設備（教室・特別教室・校内放送スタジオ・体育館・カフェテリア・廊下のフリースペース・遊具等）

次に、各学年の教室を見せていただくことになった。これは小学校低学年の教室前の写真だが、各教室は窓がついており、内側を伺うことができるようになっている。教室前の壁には、木製の積み木を置く棚があった。



教室の中は丸い机といすが並べられており、日本の教室風景とは大きく異なると感じた。



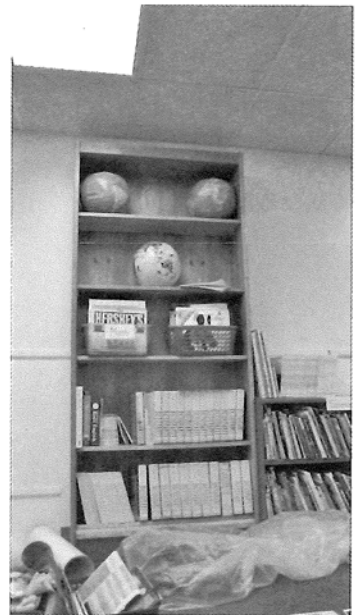
写真を見てもわかるとおり、プレイルームが室内にあるのに驚いた。というのも、この学校には校庭が存在しないため、室内で遊ぶか、ビルの屋上を使うしかないということであった（屋上も安全上の問題があるため、見学時は草花の栽培に使用しているだけであった。）



廊下の掲示物とフリースペース。休み時間で、子どもたちが思い思いに動いている。廊下も広い。建物一棟すべてが学校のため、室内を広く使っている。逆に、外に出られないのは、屋外の遊びをしたい盛りの時期であるだろうに、少しかわいそうに感じた。だが、治安も問題もあるだろうし、ニューヨーク州の法律で定められているそうである。休み時間は、外で遊ぶ代わりに、廊下で遊んだり、体育館でバスケットをしていた。



これは、小学校4年生の教室。教室内的本棚にいくつも地球儀があった。色々な種類の地球儀が並べてあり、地理の授業に力を入れていることが感じられる。



これは、広い廊下を使って、パソコンを並べている様子。椅子もおいて、廊下をPCスペースにしている。



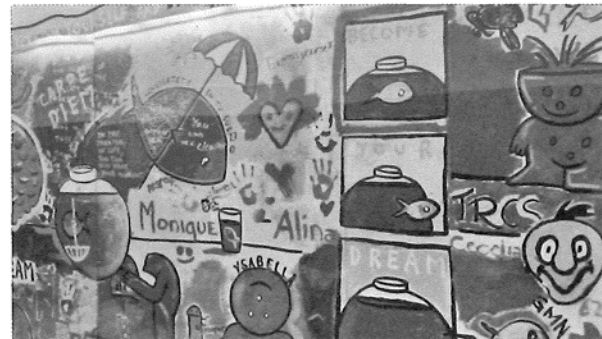
次は、子どもたちのカフェテリアに行く。子どもの人数が多いため、時間で区切って3回くらいに分けて食事をしているようだ。



これは、カフェテリアの壁面に描かれた絵である。9.11のグランドゼロから光のタワーが出ている象徴的な絵だった。RCSの一つの特徴として、ビルの中の教室のため、窓の数が極端に少ない。このカフェテリアも窓がまったくないため、壁面には生徒の絵が描かれていた。



これは校内の廊下のスペース。上記のカフェテリアと同じように生徒の描いた壁画である。色彩が豊かでかなり前衛的な感じで、MOMA (NY近代美術館) にあるような絵だった。

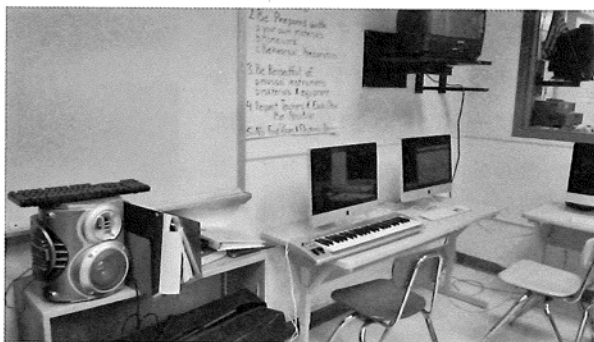
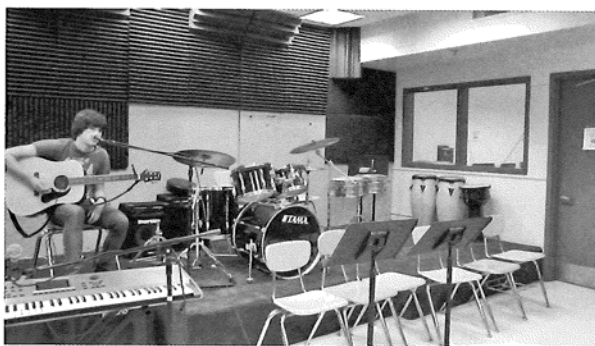


これも廊下の壁一面の絵であり、
コロンビア大学の絵が描いてある。
ここは「Learning Center」となっ
ており、休み時間や放課後の子ども
たちの自習に使えるように、机とい
すが置いてあるスペースである。こ
の絵が描かれた当時、校長だったジ
ョフィー博士(彼は同大学出身である)

もガウンを着てひそかに絵の中に描かれていたのが微笑ましかった。



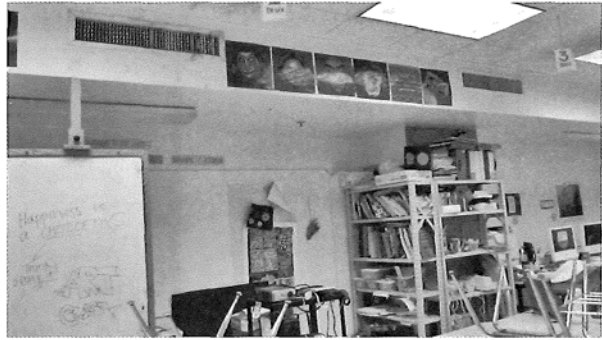
次に、特別教室に案内していただ
いた。これは音楽室であるが、何と
本格的な録音ができるスタジオもあ
った。ドラムセットやシンセサイザ
ー、パソコンなどもあり、スピーカ
ーやアンプもいいものをそろえてあ
るらしい。



校内放送ができるスタジオもある。
もともとはデパートであったため、
校内放送の設備は整っており、昼休
みに高校生がDJをやって音楽をか
けたりするそうである。

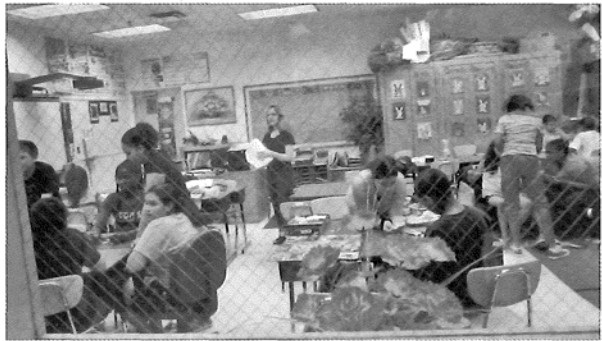


これは美術教室の様子。キャンパスや画集があり、壁面には人物画が掲示されている。



② 授業風景（幼稚園児・中学生・高校生）

ちょうど見学中に、高校生がスペイン語の試験をしている教室があった。これがその様子である。試験としても小テストのようなもので、終わった生徒は立ち歩いている場面もあった。

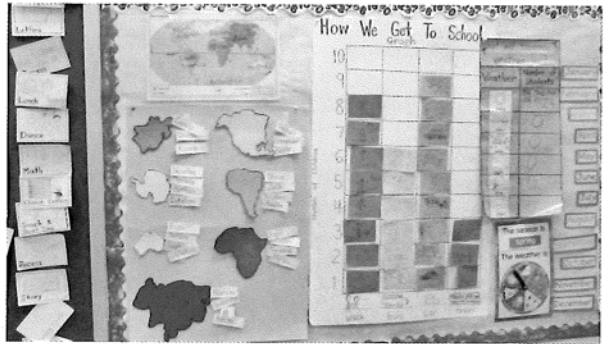


次に、プレスクールの授業を少し見学させてもらった。先生の話し方や授業の進め方を見ていて、子どもたちへの指示の出し方が興味深いと感じた。クラス全体を静かにするときにも、ただ教師が大声で「静かにしなさい」などと指示を出すのではなく、子どもたちに目を閉じさせるだけで、かなりおとなしくなることがわかった。写真を見ると（小さいので判別しにくい）、白人、アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人、アジア系アメリカ人などさまざまな人種の子どもたちがいることがわかる。



③ 使用教科書や教室および校内の展示

次に、展示をいくつか紹介する。
中心的なカリキュラムの一つである、地域研究や地理に関する展示が多く見られた。これは小学校中学年の教室内の展示。世界の大陸がパズルのようにバラバラに貼ってあり、そこに国名などが書いてある。



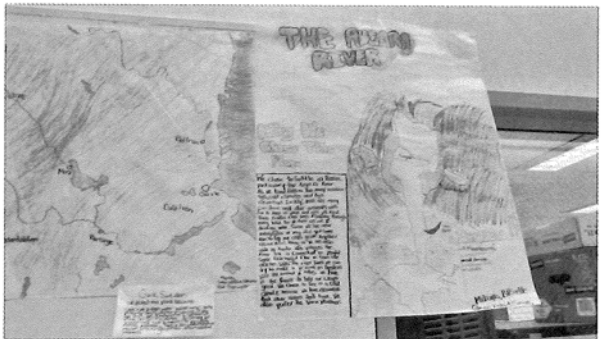
これも小学校の教室内の展示。世界地図に色が塗られていた。子どもたちがつくった地図なのだろうか。大陸別に色分けして貼ってあり、それらの国々を勉強している様子がうかがえた。



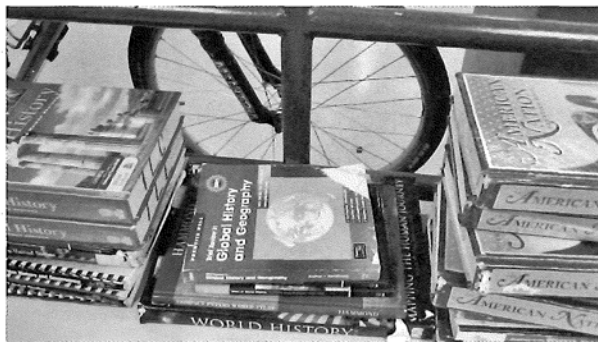
熱帯雨林について、自分の意見とイラストを添えた展示があった。子ども一人一人の意見を書いてポスターのように、掲示している。「Save the rainforest (熱帯雨林を守れ)」と書く子もいれば、「Cut down the rain forests! (熱帯雨林を伐採しろ!)」と書く子もいて、子どもによって主張や意見が違っていて、読んでいて面白かった。



これは、おそらく世界の川についてのプロジェクト学習の成果の一つであろう。この場合はロシアのアンガラ川についての説明が地図とともに書いてあった。



『Global History and Geography』という教科書が見られた。RCSの教育目的の一つは、地球市民(Global citizen)の育成にもあるということから、世界の歴史と地理を学ぶことが重視されているようである。



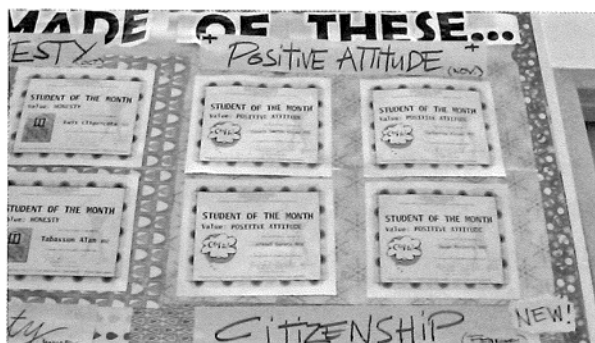
廊下のスペースに、スポーツやコンテストで受賞したときのトロフィーや賞状を飾ってあった。その上のたれまくにスクールモットー「Developing Leaders for The Renaissance of New York」が掲げられている。



壁に描かれた子どもたちの絵。かなり極彩色で、日本の小学生の絵と比べると構図がユニークで、色彩もカラフルという印象を受けた。



これは廊下の掲示である。今月の「がんばりました賞」のような掲示をやっていた。たとえば、respect, honesty, perseverance, responsibility, positive attitude, citizenshipなどそれぞれにおいて、頑張った児童生徒を、毎月「今月の生徒 (student of the month)」の形で表彰しているらしい。



④ 在校生へのインタビュー

今回は、在校生（高校3年生）からも直接学校生活について話を聞くことができた。彼女はブレスクールからこのRCSに通い、今年で12年目を迎え、同年9月には大学進学も決まっていた。彼女は、自分の兄弟も同じRCSに通っていることや、RCSの教員は、支配的・抑圧的というよりは、生徒の主体性を尊重し、個性を伸ばしてくれるという民主的な態度を持っていると印象を語ってくれた。その後、数人の教員にもインタビューする機会を得たが、彼らは自分の子どももRCSに入れるなど、RCSの教育理念に賛同し、そのカリキュラムを高く評価している様子がうかがえた。

3. まとめ

今回のRCSの見学の主要な目的は海外における創価教育の実践的側面からの検証であった。牧口の創価教育の思想がどのように解釈され、どういった側面において体现化されているのかに着目して学校見学をおこなったが、以下のような観点が見出された。

まず、実際にRCSにおいて見られた風景としては、特に地理に関する授業づくりに独創的な部分が見られた。多くの教室で世界地図が張られていたり、児童生徒が世界の山や川について調べ学習をしている展示が見られた。また、校内の掲示や表彰についても、随所にモットーが掲示されるなど、RCSのスクールモットーである「Developing Leaders for The Renaissance of New York」を子どもたち一人ひとりに啓蒙する工夫がなされていると感じられた。加えて、屋上のスペースで植物を栽培したりと、ブラジルの牧口プロジェクトにも見られるような情操教育の一端

を見ることができた。実際の授業風景を見学させてもらう機会にも恵まれたが、子どもたちは互いに協力し合いながら一つのプロジェクトを進める姿を目にすることができた。もともとはデパートであった5階建てのビルを学校という形にしたことで、屋外でのプレイスペースなどを取れないというデメリットもあるが、体育館のような屋内練習場があり、そこで子供たちは運動をするなど、体育の授業時間も十分にとっていた。

① 校長へのインタビューを通して

今回は、短時間ではあるが校長先生に直接話を伺うことができた。校長のトレイシー・ゴーティエ氏はとてもフレンドリーな女性で、RCSについて、特に生徒のリーダーシップが素晴らしく伸びてきているという話をしてくれた。どのような人材を育成するかという点について、教員たちが「Global citizen（地球市民）」という意識を持って教育を始めたところ、この数年で生徒の自覚がだんだん高まってきたと述べていた。見学の際の写真でも紹介したが、校内の掲示に、勉強や生活習慣、スポーツや学習態度などに関して今月頑張った人を表彰するコーナーを設けており、それを掲示することによって、子どもたちの意欲や士気が高まったという話もあった。

ゴーティエ校長は、教師が高い教育水準を保持したうえで、RCSの特色のひとつでもある humanistic education の概念をどのようにして教育カリキュラムに導入していくのかという問題、また生徒たちの「幸福」のために教師が何ができるのかについて、日々模索しながら実践を重ねていると語ってくれた。チャータースクールという、カリキュラムや学校の運営方針について自由裁量が認められる学校だからこそ、高い自治と説明責任（accountability）が求められる。いわば、それは保護者との trade-off（取引）である。保護者も RCS に対して高い期待を持って子どもを入学させている以上、学校側としては常に一定の教育成果（子どもの学力向上のみならず、人格的側面の育成に関しても）をあげることが必要とされている。ゴーティエ校長は、保護者との関係を良好に保つよう努めており、RCS と保護者の関係は常に「win-win の状況」にあると主張していた。RCS の目的は、「身体的にも精神的にも健康で、能力的にすぐれているだけでなく、社会正義や親切心にあふれた、いわば全体人間であり地球市民」を育成することに主眼が置かれており、「私たち RCS の教員は、当校に子どもを入学させることは、未来における最良の投資になると信じている」と語っていた。

② 創価教育の実践的側面とは

最後に、ジョフィー博士との創価教育、またアメリカにおける学校教育の動向やニューヨーク州の教育事情に関する対話や、見学当日の彼へのインタビューをふまえたうえで、創価教育（価値創造の教育）の実践的側面について思索を深めていきたい。彼は、RCS においてどの程度牧口の教育理念が反映されているかについて以下のように語っていた。牧口プロジェクトに関しては、学校全体をあげてやっているというよりも、意識のある何人かの教員が携わっているという状況だそうである（これはジョフィー博士が、RCS が単に「牧口先生の学校」「創価教育の学校」

だという誤った認識を持たれることを避けるため、最初に指摘した点であった)。次に、彼はRCSにおける他の学校と異なる大きな特色の一つでもある、牧口が強調していた「地域社会との連携の重視」の視点を基盤に作られたカリキュラムについて言及した。先にも述べたが、RCSのあるニューヨーク州についての研究・学習を、教科を超えた総合学習のような形で中心的なカリキュラムに据えて、プロジェクトベースの学習方式をおこなっているそうである。また、RCSは学力的にも人種的にも多種多様な背景の児童生徒を受け入れる方策を取っており、その意味で、門戸を大きく開いた庶民のための教育機関であることが示唆された。

さらに、ジョフィー博士は本来のチャータースクールの意義は、学校制度の脱中央集権化にあることを指摘しながら、RCSにはある種の独自性や「創造性」が求められていると述べた。これこそ、牧口の価値創造の理念を存分に発揮できる土壌ともいえる。加えて、RCSにおける教師は、単なる教育者（teacher）という側面だけではなく教育における最前線の実践家（practitioner）であり、研究者（researcher）という側面をも併せ持つべきであると主張していた。この教師観は、牧口が『創価教育学体系』で理想的な教師の姿としてあげられる「教育技術者」⁽¹⁶⁾の概念にも関連付けられるといえよう。

ジョフィー博士はRCSの今後の課題として、以下の三点をあげていた。一つには、この価値創造の教育を小学校から、中学、高校、大学教育に至るまで、すなわち異なる発達段階に適用する形で応用していくこと、そしてその方法を開発していくことが必要であると述べていた。二つには、子ども一人一人の「創造性」を育むためには、どのような教育が必要なのか、その新しいパラダイム（規範）を構築すべきであると指摘していた。最後に、池田の教育提言⁽¹⁷⁾にもあるように「社会のための教育ではなく、教育のための社会」という信念をRCSの実践や教育成果を通して、社会により啓蒙していくことが必要だと主張していた。今回のRCS見学を通して、初等・中等教育における創価教育の実践的側面の一端を垣間見ることができたといえるが、創価の教育哲学の実践的側面についての学術的研究は、日本においてもまだ十分にされていない分野といえる。その意味で、今回の調査はアメリカにおける創価教育がどのように現地の教育風土や社会文化的文脈に適用する形で実践に移されているのかを知る一つの契機になったといえるのではないだろうか。筆者にとっては、海外の創価教育にふれることのできた実り多き学校訪問となったことを最後に記したい。

見学終了後に、校門の前でジョフィー博士と記念撮影。



⁽¹⁶⁾ 牧口常三郎 『牧口常三郎全集 第六巻 創価教育学体系（下）』、1983年、第三文明社。「第三篇 教育技術論」を参照。

⁽¹⁷⁾ 池田大作 『教育提言』、2001年、創価学会広報室。

【謝辞・Acknowledgement】

本稿の執筆にあたり、現地での案内を引き受けてくださった、モンテ・ジョフィー博士、また学校見学の際お世話になった校長のステイシー・ゴートイエ先生、RCSの関係者の方々に心より感謝申し上げます。

I wish to express my sincere gratitude to Dr. Monte Joffee, Principal Stacey Gauthier, and other teachers and students in RCS. Thank you very much for providing me an opportunity to visit your RCS. I really appreciated your receptive help and cooperation.